

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520815

研究課題名（和文）瀬戸内諸島の移住開拓島における定住化と海域ネットワーク形成に関する民俗学的研究

研究課題名（英文）Cultural-Anthropological Study of the Network Formed by Emigration in Modern Times in the Seto Inland Sea, Japan

研究代表者

野地 恒有（NOJI TSUNEARI）

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60242898

研究成果の概要（和文）：

近代に移住者の開拓によってその集落が形成された島（移住開拓島）において、周辺地域との海域ネットワークから定住生活の成立について調査研究した。その結果、移住開拓島を「困窮島」（救貧制度）とする従来のとらえ方に対する異見、「いわれ」（伝承）の創出によるネットワークの形成、「海縁」ネットワークという分析視角、過疎とは異なる移住開拓島の定住化の途絶（無人島化）などを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

I analyzed cultural-anthropologically the network formed by emigration in modern times in the Seto Inland Sea, Japan. As a result, I clarified the process that became the uninhabited island, the network which was formed by creating tradition, and I revised the way of thinking called a poor island.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：移住・海域ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

民俗学において経済的活動をあつかう生業という分野では、何代も一定の地域に住み続けてきた人びとの、その居住地域内で営まれてきた活動を基本とする研究が主流を占めてきた。それに対して、研究代表者はこれまで移動・移住という漁民の行動と漁撈技術の関係を中心に研究を進めてきたが、近年、

このような移動という活動や移住社会をとりあげた研究もみられるようになってきた。たとえば、出身地で保持していた文化事象が移動・移住先にどのように伝えられ変容するかといった研究（池田哲夫『近代の漁撈技術と民俗』吉川弘文館、2004、氏家等『移住とフォークロア』北海道出版企画センター、

2007) や、出稼ぎという活動が出稼ぎ出身地の生業全体の中にどのような位置を占めているか(松田睦彦「瀬戸内島嶼部の生業におけるタビの位置」『国立歴史民俗博物館研究報告』第136集、2007)といった研究などである。

しかし、こういった研究は出身地の文化を基準として移動・移住をとらえているのに対して、本研究がそれらのもとは大きく異なる点は、いろいろな地域からの人たちが集住する移住社会には独自の文化が形成されるととらえ、その定住生活が形成されていく実態の中から伝承的な特徴や民俗性を引き出そうとしている点である。移住により形成された定住社会は出身地の文化伝播により特徴づけられた副次的な社会ではなく、何代も一定の地域に住み続けてきた人びとから成る固定的な定住社会とは異なる独自の性格をもつとしてとらえている。

こうしたとらえ方に基づいた研究は、科研費基盤研究C「出漁漁民の移住地域において開発された移住漁業の漁撈技術に関する民俗学的研究」(平成11年～13年度、課題番号11610316)において実施して以後、研究代表者はその成果を公表しつつ、同時に進展させてきた(『移住漁民の民俗学的研究』2001[平成13年度科研費研究成果公開促進費]、『海の民俗文化』[共著]2005、『漁民の世界—「海洋性」で見る日本』2008)。それらでは、近代以降に日本各地でおこなわれた漁民の移住実態をとらえるとともに、それらの移住地域において構築された漁業活動に共通してみられる漁撈技術の特徴を明らかにして、その特徴を「専一性」(特別で独自の技術に特化して移住後の漁法を構成する特徴)として提示した。そして、その過程で移住地域の漁業展開において周辺地域との関係形成が定住化と深く関わってくることが予想され、新たな課題とし

て出てきた。一方、本研究で調査対象とする瀬戸内諸島では、よそに出て行く出稼ぎや海外移民といった移動労働に関する研究はこれまで多くなされてきた(たとえば松田「瀬戸内島嶼部の生業におけるタビの位置」既出)のに対して、明治時代以降に瀬戸内諸島の中に入ってくる人たちにより形成された社会の研究はほとんどなされてこなかった。もっとも、瀬戸内海の移住社会の研究については宮本常一の決定版ともいえる研究があるが(『瀬戸内海の研究—島嶼の開発とその社会形成海人の定住を中心に』未来社、1965)、それは近世以前の社会を対象としたものである。明治時代以降に形成された移住開拓島の存在の報告は散見されるが、そうした移住開拓島の定住生活構築に関する調査研究はほとんどなされてこなかった。近代に形成された移住開拓島が本研究の調査対象である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、近代に移住者の開拓によってその集落が形成された島(移住開拓島)において、定住生活確立のために展開される生活について、周辺地域と結ばれる人との海域ネットワークの構築という観点から調査研究して、流動的な性格を持つ移住社会の特徴を民俗学的に明らかにすることである。

瀬戸内海における移住開拓島を対象として、定住化に向けて移住後の生活を確立させるために展開させていくさまざまな活動を周辺地域との関係に視点をおいて分析して、周辺地域との海域ネットワーク形成から定住生活の成立過程を明らかにすることにある。

3. 研究の方法

研究は現地調査によって進める。現地調査の方法は、聞き取りと参与観察を中心として、得られた資料をデジタルカメラやICレコーダーなどの機材で情報を収集・記録する。同

時に、文献情報資料の調査もおこない、その収集とデータベース化を図る。

現地調査先は、瀬戸内諸島において、移住開拓島として香川県丸亀市小手島と、その周辺地域として岡山県倉敷市下津井と香川県丸亀市内を主としてとりあげる。その現地調査の主題は大きく分けて、移住開拓島の形成過程、移住開拓島からとらえた外部社会との関係形成、外部社会からとらえた移住開拓島との関係形成の3点である。

4. 研究成果

(1) 移住開拓島という視点から、従来の「困窮島」というとらえ方に異見を提起した。「困窮島」とは、村の救済制度として困窮した人が生活再建をするために用意された島のことである。村の共有地の無人島へ移住して出作りをおこなう開拓・開発の姿を「困窮島」という制度としてとらえるのではなく、移住開拓島の移住プロセスの1コマとしてとらえるべきである。

(2) 「いわれ」（伝承）の創出による海域ネットワークが形成される。高度経済成長期にレジャーの大型化に伴って、各地に新規の行楽地や観光地がつくられた。こうした場所には共通して新しい「いわれ」がつくられている。「いわれ」によってその場所は名所となる。「いわれ」が名所をつくり人を集める。新たな行楽地や観光地の「いわれ」にはその場所が小説や映画の舞台になったことさえも取り上げられる。「いわれ」は観光地だけに作られるのではない。移住開拓島でも「いわれ」を作ることは周辺地域とのネットワークを作り出すことになる。

(3) 移住開拓島と周辺地域との間に形成される海域ネットワークを「海縁」ネットワークととらえ、移住開拓島研究の分析視

角として提示した。

①内縁系と外縁系

「海縁」とは海のへり、ふちのことではない。海によって作り出される縁(えにし)、海を媒介とした関係のことである。この海縁について説明するに、まず、〈外縁系〉と〈内縁系〉について説明しておく。我々の社会には内と外に向かってさまざまなネットワークがはりめぐらされている。社会の内部にはりめぐらされている諸関係を「内縁系」、社会の外部にはりめぐらされている諸関係を「外縁系」と呼ぶこととする。

伝統的な社会においては、とくに内に向かってはりめぐらされている濃密なネットワークが注目され、民俗学では、この濃密な内縁系を明らかにすることに重きが置かれてきた。

伝統的な社会の内縁系の姿は、自給自足の完結体という幻想を抱かせる。しかし、内縁系だけに目を向けると自給自足に見えるが、どのような社会といえども、外縁系をもたない社会はない。自給自足度が高そうな社会だからといってそこが自己完結体であるわけではない。

一方、移住社会では外縁系が重要な役割を果たしてきた。先に、移住社会は移住先の周辺地域との関係性を構築することによって形成されるのだ。周辺地域との間に取り結ばれるさまざまなネットワークのかたちが移住社会の文化である。つまり、移住社会の文化とは外縁系のかたちのことである。移住社会の文化は外縁系に蓄積する。

②海縁について

移住社会とは外縁系が優位になって構築されている。いわば外縁系優位社会である。その外縁系の一つが海縁ネットワークである。

海縁とは海にかかわる人やものの移動が作り出す関係のことである。土地に基づく関係を地縁といい、血筋に基づく関係の血縁というのと同様な、縁を使った用法であり、海を媒介とした関係のことである。そして、移住社会では、血縁や地縁とは異なる、海を軸として広範囲に多方面に向かって作り出されてきた関係—海縁—が重要な役割を果たしている。

海縁ネットワークは移住開拓島をとらえ分析する視角であり、地域おこしや復興ビジョンにつなげられる課題につながる。

海にかかわる人やものの移動が作り出す海縁ネットワークは沿岸部だけのことではない。内陸部とのつながりもある。海縁ネットワークは、沿岸を結ぶ「海域ネットワーク」という課題を出発点として見出された視点であるけれども、沿岸を横につなぐ海域ネットワークとは異なり、内陸にあっても海縁ははりめぐらされている。

(4) 柳田国男の「猫の島」(『柳田国男全集24(ちくま文庫)』筑摩書房、1991)では、犬を連れて渡ると祟りがあるという「猫の島」と呼ばれる島には、かつて島を葬地とした慣習があり、犬が葬地と人里を行き来するため、死の穢れに触れる犬を島に入れるのを忌み嫌ったため、そのような禁忌が生まれたのだろうと柳田は解釈している。

たとえば宮城県石巻市の田代島では、「犬を牽いて渡ってはならぬという戒めが前にあって、その理由がやや不明になって後に、犬を敵とするものが島にはいる、それは猫だという説が起り、その猫には違反を罰するだけの、畏るべき威力があるように考えた」。つまり、田代島を猫の島とする以前には、島を葬地とする歴史があり、「島を開きに後から入った人びと」は島を葬地とした慣習を知

らず、ただ犬を連れて行ってはいけないという戒めだけが伝えられて、その理由が猫の神秘性に求められるようになったというのである。

田代島の開拓前史に、島を葬地とする民俗事例があったかどうかは不明である。研究代表者は島を葬地とする事例を民俗としてはとらえられないだろうと考えている。むしろ、柳田が「猫の島」の中で犬を連れて行ってはならない島としてあげられている田代島、式根島(東京都伊豆七島)、大黒神島、小黒神島(広島県江田島市)が、みな移住開拓島であることに注目する。移住開拓島の飼い犬はワタクシ(私有)の象徴であり、移住開拓島に犬を連れて行くというのは移住定着と土地占有の意思を表していると考えられる。ゆえに、むやみに犬を連れ込むことは禁止されるのである。村の共有地になっているような島へ渡るときには土地占有の示威行為となるため、犬の持ち込みは禁止されたのである。

丸亀市小手島では犬を飼ってはいけないということはない。実際に犬を飼っている家はある。その小手島で、本研究の調査で次のような話を聞いた。「明治時代の頃、小手島に人が住み始めた頃には手島の人が小手島で放牧をしていたというけれども、小手島にはそのような平坦な土地はない。入り江に牛をつないでいたていどではなかつたろうか。手島の人が自分の土地であることを示すために、土地の権利を主張するために、小手島に牛をつないでいたのではないだろうか。」犬を飼うということではないが、動物(この場合、牛)を土地につなぐという行為はその土地の占有(私有)を表示する、という意味合いがこの話を語る島人の感覚にとらえられるのではないか。

(6) 移住開拓島のなかで、有人島化せずに無人島化した事例を確認した。無人島化は過疎化とは異なり、移住開拓島の定住化プロセスにおける途絶をあらわす。

最終的に、定住化に成功した移住開拓島に注目して、定住過程で構築された周辺地域との海域ネットワークについて調査してきた過程で、瀬戸内海域において移住開拓島が確認されるとともに、その多くが無人島化していることがわかった。

そこで、定住化に成功し持続している事例だけを対象とするだけでなく、定住化に失敗し無人島化した移住開拓島の事例にも注目して、その定住生活が途絶していった過程を対比的にとらえて定住化に成功した事例と比較研究することにより、移住社会の定住過程や移住社会の特徴を、より一般化した形をとらえることができるという新たな課題を見出した。移住開拓島を定住化・無人島化と対比させ、移住後に構築される生活を持続する生活体系・途絶する生活体系と対比させて、移住開拓島の形成過程をより一般化した形をとらえられうると予想する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①野地恒有、移住開拓島の無人島化—移住開拓島の民俗学ノート(3)、日本文化論叢、査読なし、21号、2013、53—63

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/>

②野地恒有、〈海縁〉ネットワークの形成—移住開拓島の民俗学ノート(2)、日本文化論叢、査読なし、20号、2012、83—95

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/>

③野地恒有、移住開拓島の民俗学ノート(1)、日本文化論叢、査読なし、19号、2011、45—55

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/>

[図書] (計1件)

①野地恒有、自刊(愛知教育大学野地研究室)、

[その他]
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野地 恒有 (NOJI TSUNEARI)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：60242898

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし